

## 照葉樹林文化研究会 2017 in Osaka 開催報告

照葉樹林文化研究会  
2017.07.12 08.15改訂 09.10追補

照葉樹林文化研究会は、盛会のうちに終わりました。

とき 2017年6月10日(土)13:00  
ところ 大阪府立大学学術交流会館・小会議室

代表世話人あいさつ13:00

講演発表13:05～

- 1.和漢籍における“あかざ”の表記史:学名適用以前まで  
山口裕文(大阪府立大学名誉教授)・久保輝幸(武漢工程大学外語学院)・池内早紀子(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)
- 2.茶の陰陽五行と養生  
水野杏紀(関西医療大学)・平木康平(大阪府立大学名誉教授)
3. 特別講演 中尾博士とシャクナゲ 三津山咲子 (六甲高山植物園)

研究フラッシュ15:00～

1. 先島諸島の苧麻栽培と利用  
大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)
- 2.河井洋著『麻と日本人』について  
松本初子(大阪府立農芸高校)
- 3.タイ・石垣島・中国にみられる手首にヒモをまく習俗について  
大形徹(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)・山里純一(琉球大学名誉教授)・佐々木聡(大阪府立大学/日本学術振興会特別研究員)・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)
- 4.訶梨勒—民族文化的側面と植物学的考察  
林みどり・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)
- 5.アジサイの栽培と利用の文化  
縄井あゆみ(神戸大学発達科学部)・前中久行(NPO法人緑の地球ネットワーク代表)・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)
- 6.キクタンギクの保全再生活動  
佐藤正吾(京都市都市緑化協会)・百生太亮・白須友貴・森本幸裕(京都学園大学)
- 7.中世の山城(やまじろ)における薬用植物テンナンショウの分布  
種坂英次(近畿大学農学部)
- 8.焼畑実践20年のレジメ  
山口聰(林間園芸研究センター)

研究企画17:00～

照葉樹林文化：森と海との文化交流  
金子務・山口裕文(大阪府立大学名誉教授)

総会17:20～

世話人の3名(種坂英次(近畿大学農学部)\*・西野貴子(大阪府立大学理学系研究科)・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科))が追加され、次回開催予定が承認された。\*辞退 整備完了した会場周辺



→

## 講演要旨

### ●和漢籍における“あかざ”の表記史:学名適用以前まで

山口裕文(大阪府立大学名誉教授)・久保輝幸(武漢工程大学外語学院)・池内早紀子(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)

シロザとアカザを含む“あかざ”は、すべての成長段階で何らかに利用され、文芸にもあらわれる。あかざ(藜)は、嫩葉を野菜や羹や雑炊(粥)とし、種子を雑穀や酒とする。鮮紅の葉や花穂は切花や観賞用に、完熟した莖は杖に使われる。植物体の焼灰は、メッキの腐食剤、染色の媒染剤に、汁液はうがい薬や生理薬や皮膚病の軟膏とする。文芸では漢詩、題画、小説、俳句、和歌、浄瑠璃に杖や羹としてあらわれる。が、現代の植物名シロザは文芸にはあらわれない。どうして、アカザがシロザになったのか、なぜ無粋な名前を植物学者は推奨するのか、全くの疑問である。本講演では、現在までの藜の文化的扱いを紹介して、漢名と和名の変遷を考証する。

植物学上、“あかざ”は、アカザ科(現在はヒユ科)アカザ属に所属する。近縁の作物にはハウレンソウやテンサイ(ビート)やフダンソウがあり、ホウキギ(地膚)やマツナ(鹼蓬)やオカヒジキ(猪毛菜)などの山野菜もある。アカザ属にはマルバアカザ、ウラジロアカザなどがあるが、ふつうの“あかざ”は、シロザ *Chenopodium album* var. *album* とアカザ var. *centrorubrum* の6倍体の雑草である。昔、栽培されていたアカザは台湾や東南アジアで利用されているムラサキアカザやタカサゴアカザにあたり、時に半野生する。若い莖葉は野菜としてしばしば料理され、種子は雑穀と酒に使われている。アカザは野生利用から半栽培を経て栽培化したようであり、その過程は、単純に食べる、大きく成熟した莖を杖にする、杖利用には若い枝を順にとって食べる、風選などで種子を集める、大きな花穂を残し、翌年播種する行為によったと推定される。これは“あかざ”の半栽培から専用化した栽培種への人為選択を示している。

漢名の変遷をみると3世紀ころまで「釐、栳、萊、藜、藿、華」があらわれ、藜は継続的に使われている。10世紀頃に青藜や灰藿があらわれ、15世紀ころから葉の紅い舜芒穀、丹藜、紅心灰藿や杖藜が藜の異名としてあらわれ、葉の青白い灰條、灰菜や白藿があらわれる。一方、倭名(和名)の変遷をみると、10世紀ころ阿加坐、阿加佐、11~16世紀には「あかざ」か「アカザ」、17世紀には「あかざ」か「あをあかざ」、18世紀には「あかあかざ」か「しろあかざ」、19世紀以降にはアカザとシロザと表記されるようになる。19世紀初頭に和名のアカザは漢名の藜と学名の *C. rubrum* に対応して、シロザは漢名の灰藿と学名の *C. album* に対応して水谷豊文や伊藤圭介によって使われてからである。アカザは貝原益軒によりアカザと解釈され、学名の *C. rubrum* はそれを受けて引用されたが、*C. rubrum* は東洋には存在しない欧州の植物である。藜へは有効な学名 *C. album* が最も古く18世紀に引用され(Thunberg 1784)、当初 *C. album* はアカザと呼ばれていた。*C. album* のなかの葉心の紅い変異体にアカザ var. *centrorubrum* を命名した牧野富太郎は *C. album* の表現にシロザの和名を推奨した。東アジアの植物文化を無視したこの“科学的行為”によって文芸と繋がらない名前が出現したのである。根拠を欠く名前の解釈と誤用、植物の栽培化過程の不理解が混乱をさらに進め生物文化多様性の言語劣化の原因となっている。

### ●茶の陰陽五行と養生

水野杏紀(関西医療大学)・平木康平(大阪府立大学名誉教授)

「茶」はツバキ科の常緑樹チャ(学名: *Camellia sinensis* (L.) Kuntze) の葉や莖を加工したものである。茶という名のつく「麦茶」や「べにふうき茶」などは「茶」の名があるものの、本来的には「茶」ではない。古くは茶といえば緑茶をさしたが、後には、中国六大茶(緑茶、青茶、黒茶、紅茶、黄茶、白茶)にみられるように、製造工程や茶の効能などの異なる種々の茶が生み出された。現代医学からも近年には茶のさまざまな効能が指摘されているが、ここでは茶に関するふたつの文献をもとに、陰陽五行学説を中心に茶の効能について考察する。

第一の書は、陸羽の『茶経』である。

中国の唐代に陸羽(733~804年)が茶について最初に著わした著作である。この中には唐代に蓄積され

た茶に関する知見が、ほぼすべて網羅されている。いわば「茶の百科事典」とも言うべき書で、後世これに勝る茶書は現れていない。「茶の聖典」である。

『茶経』の内容は、一之源「茶のおこり」、二之具「製茶器具」、三之造「製茶法」、四之器「茶道具」、五之煮「茶の煮立て方」、六之飲「茶の飲み方」、七之事「茶に関する史料」、八之出「茶の産出地」、九の略「略式の茶」、十の図「茶経を軸にして部屋に掛けておくこと」、の諸条からなっている。

第二の書は栄西の『喫茶養生記』である。

栄西(1141~1215年)は、鎌倉時代、比叡山において出家受戒し、生まれつき学問が好きで、そこで仏教の学問修行をつんだ。二度にわたり中国(宋)に渡り、中国の仏教や文化を修得した。帰国後、その地で体得した、新しい仏教、禅宗を京都の地で広め、日本における臨済宗の祖とされている。当時、比叡山の仏教は頹廃し、山内では闘争が絶えなかった。それに対して、栄西は、戒律を重視し、仏教を本来の形に戻すべく、いわば宗教改革を志した人物である。

栄西は、宋からさまざまな経典や文物を持ち帰った。当時、中国の寺院で日常的に行われていた飲茶の習慣を日本でも広めるべく、茶の実を持ち帰り、建仁寺境内に植え、飲茶を広めたため、日本の「茶の始祖」とあがめられるようになった。栄西は『喫茶養生記』を著わしたが、その書の内容は、「喫茶による養生法に関する抄記(抜き書き)」である。

発表では、一之源の記載をもとに茶の効用を紹介し、喫茶養生記をもとに喫茶がいかに養生に有効であるかを踏まえ茶の機能を考察した。

### ●先島諸島の苧麻栽培と利用

大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)・大形徹(大阪府立大学人間社会システム科学研究科)・佐々木聡(大阪府立大学特別研究員)・山里純一(琉球大学名誉教授)

苧麻(ちょま)はイラクサ目イラクサ科の多年生植物であるカラムシ *Boehmeria nivea* var. *nipponnivea* を示す。文献上では他にも青苧(あおそ)・紵(お)・山紵(やまお)・真麻(まお)など多くの呼び名があるが、沖縄県石垣島ではブーとも呼ばれている。苧麻は一般的に繊維として利用されており、先島諸島においてはその繊維で織った布は上布と称され、八重山上布や宮古上布は沖縄県無形文化財に指定される伝統工芸品である。

石垣島における苧麻栽培と利用について現地調査した。現在、石垣島での苧麻の栽培は大規模ではなく、家庭単位の小規模な1坪程度で1年に上布1反分の材料が採れる程度であった。かつてはどこの家庭でも栽培されていたそうであるが、近年は、織り手の減少、苧麻に対する伝統的知識の喪失から栽培箇所はわずかとなっていた。栽培の苧麻は草丈1.5~2.0mにも達し、葉の裏側は柔らかい軟毛に覆われている。主に挿木によって繁殖され、50日程度で収穫できるようになる。野生のものと交雑しやすいためか栽培場所の多くは高い塀に囲われていた。また、管理放棄によって栽培苧麻の逃げ出しと野生化も起こっていた。

苧麻は、先島諸島の人々にとっては上布の材料となる他に、アンツクと呼ばれる日常のバックを編む材料となり、時には身を守る魔除けとしても使われていた。繊維として使用するには、栽培苧麻が適しており、伝統的文化の継承、保存には知識とともに材の確保が必要不可欠である。良質の栽培苧麻の保存と栽培のためにもこれらの植物学的な実態の把握が必要である。

### ●河井洋著『麻と日本人』について

松本初子(大阪府立農芸高校)

『麻と日本人』~私たちはいつから麻について知らなくなったのだろう~(竹林館)の著者は、私の父である。「女性」が知っていて、自分が知らない世界のあることに衝撃と好奇心を覚えて著者は「麻」について調べだしたようである。書の題を見て、高校の時に受けた国語の模擬試験を私は思い出した。柳田国男の『木綿以前の事』である。

「木綿以前の事」の章では木綿への愚痴が述べられ、外の埃はこれのみでも十分であるのに、家の中ではさらに綿密に隙間を木綿の塵が占領し、掃き出せばやがてよその友だちと一緒に戻ってくる。一層始末の悪いことは、熱の放散の障碍である

「何を着たか」の章には、  
然らば多くの日本人は何を着たかといえば、勿論主たる材料は麻であった。麻は明治の初年までは、それ

でもまだ広く栽えられていた。～藤蔓の皮で布を織って常服とすることは、山村一般の生活技術であって、フヂは元來葛類の総称である と他の繊維にも言及している。

改めて調べなおしてみると、カラムシ（イラクサ科）は、苧麻（ちょま）、青苧（あおそ）、真麻（まお）、苧麻（まお）、からそ、ラミーなどと呼ばれているのに、大麻（アサ科/クワ科）はヘンプの英名があるだけである。（色々と呼び方の多いのはカラムシが利用されてきた証拠で、大麻以外ほとんど知られていないのは新しい渡来ではないか）

『麻と日本人』は、著者の参加している同人詩誌「リヴィエール」での3年にわたる連載をまとめたものである。

まえがきは、ある一つの言葉について(私が)全く知らないと言うことの意味は何か?から始まる

第一章「近松劇におけるマオ」には、

堀川波鼓(なみのつづみ)では、「奥様は旦那様の留守中苧績なさると聞いて～」とある。真苧(まお)の包みの山を男(まお)にかけている。これは、武家の奥様でも自家消費や内職で機織りをしていた事情を示している。カラムシと大麻の識別は無かったのかも知れない。「関東麻」と太夫のセリフ「大麻」かも江戸期の日本では、大麻の模様の着物柄や家紋にもカラムシとの説明文もある(当時から都会人は大麻も苧もあまり強く意識して区別してきたとはいいいがたいようだ)

第二章 日本における麻の歴史 (省略)

第三章 麻にかかわる言葉についての疑問と考察には、「うむ」ということばを知らない(私)がいる。夏目漱石の「草枕」には、ある老女の言葉「針も持ちます苧も績みます」とある。紡績(ぼうせき)を大辞苑でみると、短い繊維を平行に並べ引き延ばして撚(よ)りをかけ、1本のいとにすることとある。つむ「紡」とは、綿や繭から糸を引き出しよりをかけて糸にすることで、う「績」とは麻や苧などの繊維を細く長くより合わせて糸にすることである。綿や絹は紡ぐといい、麻や苧は績むとなる。麻の場合は、績むと紡ぐのどちらの工程もあり、まさしく「紡績」となる。

第四章 近・現代における麻 (省略)

父と語り合えばよかったと今になって思うこと

アンデルセンの『白鳥の王子』には、継母が11人の兄に魔法をかけて白鳥にってしまったのを末の妹がイラクサを紡いだ糸で編んだ帷子を着せると魔法がとけるという話がある、子供の頃はイラクサで手が蕁麻疹になるシーンだけが印象に残ったが、今思うと西洋でも昔はイラクサでも布を作っていたのかも

生活の要素は衣>食>住の順だろう。

アダムとイブは知識の実を食べた…すると、その二人の目は開け、ふたりは自分たちが裸であることに気づくようになった。そのため、彼らはいちじくの葉をつづり合わせて自分たちのために腰覆いを作った(創世記 3:7)。知識を持った「人」は「食」よりも「衣」をまず意識したことから、文化を考えると食よりも衣のほうが重要なのかもしれない。(旧約聖書時代のイスラエル人は亜麻や羊毛を紡いで作った布を使用していた)

寄贈できる本が数冊あります。大学の図書館等に寄贈したいと思いますのでご連絡ください。

## ●タイ・石垣島・中国などにみる手首にヒモをまく習俗について

大形徹(大阪府立大学)・山里純一(琉球大学名誉教授)・佐々木聡(大阪府立大学/日本学術振興会特別研究員)・大野朋子(神戸大学)

これまでの研究から「宗教」や「思想」というものは、タマシイ(魂)と呼ばれる概念を前提として形成されてきたと考えている。そのタマシイの存在はいわゆる「邪」や「悪霊」などと称されるものによって脅かされるとして、人々は様々な「辟邪」に対する方法をとってきた。本報告では多種多様に存在する辟邪のうち、東アジアから東南アジアの広い地域で共通して行われていた事象の一つを紹介する。

2015年から2017年にかけてタイ北部および沖縄県石垣島において現地調査を行った。タイ北部に居住する少数民族の多くは、手首に木綿の紐を巻きつけていた。聞き取り調査では、この行為は肉体からタマシイが抜け出ることを防ぐためであり、手首の紐によってタマシイと肉体を結んでいるという。例えば、リス族のある男性は木綿紐を手首に結ぶ際、「チョ・ハ・フワン(魂よ戻れ)」と叫ぶ。彼らにとって不幸な出来事は、タマシイの存在と直結しているため、身を守る「お守り」や「魔除け」として日常的に行われていた。

タイ北部で見られたこの行為は、八重山諸島の石垣島においても共通して存在していた。ここでもまた、「マブイ」や「タマシイ」と呼ばれるタマシイの存在が日常的にみられ、使用する意味においてもタイと同様であった。しかし、紐の素材については異なっており、タイ北部が木綿なのに対して、石垣島ではイラクサ科の苧麻を用いる。辟邪には、行為と物質が単独あるいは組み合わせて用いられるが、今回の調査では行為のみが共通していた。紐の素材が木綿と苧麻で異なっていたのは、タイ北部と石垣島という異なる地域における自然資源の供給の違いも要因として考えられる。

中国については、手首に赤い紐をまく習俗がひろく存在する。現在、調査を続行中である。

(※本発表の一部は平成29年度(2017年度) 基盤研究(C)「タマシイの観点からみた中国を中心とする東アジア辟邪文化の総合的研究(代表大形徹)」の研究成果である。)

### ●訶梨勒—民族文化的側面と植物学的考察

林みどり・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)

シクンシ科モモタマナ属のミロバラン *Terminalia chebula* はカリロク(訶梨勒、訶黎勒など)とも呼ばれ、日本では、一般にその果実は茶室や書院の床の間の柱に飾られる香り袋の中に入れており、この香り袋もまた訶梨勒と称される。このような利用は日本以外の地域では見られない独自のものであるが、この香り袋に内包されるミロバランの民族学的、植物学的な実態はよくわかっていない。

本研究は、ミロバランの利用に着目して柱飾りの香り袋である訶梨勒の実態を明らかにすることを目的としている。

ミロバランはインド、ミャンマーなどを原産地とする落葉高木樹であり、訶子と呼ばれる生薬として現在も広く利用されている。ミロバランの自生するネパールでは、乾燥させた果実を炒ったあと、口に含め咳止め飴のように使用するなど民間薬として定着しており、薬としての利用のほかはみられない。また、ミロバランと呼ばれる生薬はほかに複数種存在している。

日本ではミロバランは、『貞丈雑記』巻六・飲食之部に「出陣の時かりろくを呑むと云ふ事、旧記にあり」、また「薬の訶梨勒は一名を訶子とも云ひ、薬種也」と記述されている。『本草綱目』巻三十五下、木之二によると、カリロクには停滞したものを解く効果、烈しい症状を抑える効果、上がった気を降ろす効果などが期待されるとあり、精神安定の効用があるとされている。また、『貞丈雑記』第十四・座鋪飾之部には、「柱飾もかりろくも薬などを入る物かと思はるるなり」とあり、柱飾(つまり前述の「香り袋」)や器物としてのカリロクが薬の容器であるとも考えられる。

文献資料から読み取れば、カリロクの果実には、やはり日本においても薬としての役割があったと伺える。茶の湯の席における訶梨勒は飾りとしてだけでなく、本来、薬の容器とも考えられており、そこから常備薬としての役割を持っていた可能性も想定される。しかし現在は、柱飾りとしての訶梨勒は、形骸化して、ミロバランの果実を含まず、ただその果実の形を模した美しい布袋の中に香材料を入れた香り袋となっている。

### ●アジサイの栽培と利用の文化

縄井あゆみ(神戸大学発達科学部)・前中久行(NPO法人緑の地球ネットワーク)・大野朋子(神戸大学人間発達環境学研究科)

近年、アジサイに対する人気は高まりつつあり、アジサイは庭木や切り花としてだけでなく、景観資源や観光資源として注目されている。ここでは、アジサイの利用の歴史や文化的な側面を概観する。

アジサイはその名の語源もはっきりとしておらず、多くの植物が登場する日本の古典和歌にもほとんど出てこない。しかし、わずかな記載にアジサイは「庭のあぢさゐ」「植ゑしあぢさゐ」などと歌われており、古くから庭木として植栽されていたようである。

現在は、アマチャが古くより生薬として用いられてきたことに加え、アジサイは観賞植物として多様に用いられている。例えば、生花や切り花はもちろんのこと、インテリアとしてのドライフラワーや、母の日のギフトに贈られることも多い。さらに、コンテナ栽培では屋内外で容易に利用でき、その修景の効果は高い。近年は各地の植物園やアジサイ園、寺社などでシーズン時にアジサイ散策のイベントが多数催されており、地域の観光資源としての要素も強くなっている。アジサイの需要の増加にもなっており、シーズンから外れた秋や冬に出荷できる系統など、新たなアジサイも開発されている。

アジサイ属は日本原産で現在14種の自生が確認されている。かつてシーボルトが発見し、幻のアジサイと呼ばれたアジサイであるシチダんカが兵庫県六甲山で再び見つかると人気を集めるなど、アジサイは多様な資源として今後の活用が期待される。植物的観点だけでなく、歴史と文化的背景を踏まえたアジサイの魅力を明らかにする必要がある。

### ●キクタニギクの保全再生活動～東山と菊溪の歴史文化、ネットワーク、今後の課題～

佐藤正吾（公財・京都市都市緑化協会）・百生太亮・白須友貴・森本幸裕（京都学園大学）

和名が京都・東山の地名に由来する希少植物キクタニギク（広義*Chrysanthemum seticuspe*、狭義*C. seticuspe* f. *boreale*）に関して、関連する歴史文化、ネットワークでの保全活動と今後の課題などを報告する。

キクタニギク(菊溪菊)は、東山では絶滅し、京都市内の自生地はごく限られている。森林・河川環境の変化とシカの食害等により希少となった。かつては、生活で利用され、香料、薬用、食用とされていた。和名のもとになったキクタニ(ダニ)は菊溪、菊谷、菊澗と表記され、下流の川は菊谷川で菊川ともいう。東山区の地名「下河原町」はその名残である。

菊溪(川)の歴史と今を絵図や地誌等から整理すると次のようになる。

- ・『元禄十四年實測大絵図』（元禄14年=1701年）に高台寺から建仁寺境内を経て鴨川に注ぐ様子と東山が畑などに利用されている様子が描かれている。
- ・『雍州府志』（天和2～貞享3年頃=1682～86年頃）の鷲峯山（高台寺）の項に「十の境」の一つ「菊潭水」を飲み長寿となった僧がいるとある。
- ・『都林泉名勝図会』（寛政11年=1799年）の双林寺長喜庵の項に文人のサロンだった塔頭があり、境内に菊溪の流れる様子が描かれている。
- ・『花洛名勝図会』（元治元年=1864年）の金玉山双林寺の項に西行や頼阿を偲んで訪れた本居宣長が菊溪を詠んだ歌などが紹介されている。
- ・現代の航空写真をみると、近代の市街化で下流の川はほぼ暗渠化され、キクの育つ河原はない。東山も明るい森林が失われた。

保全・普及啓発活動は、保全再生の2つの考え方：生息域外保全と生息域内保全にそって、外来種問題に留意してすすめている。外来キクタニギクの問題として、緑化工の種子に混入した外来キクタニギクが1990年代に15府県で見つかり、在来植物の遺伝的多様性の面で懸念される（中田政司 2013：栽培菊と外来ギクによる日本産野生ギクの遺伝的汚染；山口裕文編「栽培植物の自然史II」、北大出版会2013）。

KES環境機構の活動として、企業等が生物多様性のためのCSR活動で本種の栽培に参加している。また、京都伝統文化の森推進協議会の活動として林相改善事業の一環で菊溪に植栽している。広島大学を中心とする研究プロジェクト「NBRP広義キク属」にもサンプル提供や情報交換を行っている。

保全再生の今後の課題に以下がある。①山野の環境の改善と維持、②遺伝的多様性の確保、③外来キクタニギク、園芸品種、近縁種との交雑の可能性への注意、④モニタリング調査の継続と評価、⑤人々の記憶や史料等から関連する生活文化の掘り起しを進める必要性

### ●中世の山城（やまじろ）における薬用植物テンナンショウの分布

種坂英次（近畿大学農学研究科）

テンナンショウ属植物（天南星、*Arisaema* spp.）はサトイモ科の多年生植物であり、その塊茎は日本では主に五十肩等の血流に関わる症状の和漢薬として、またアジア諸国では伝統的に細菌感染の予防薬として用いられている（中薬大辞典）。本研究では、奈良県平群町を中心とする生駒山系南部及び矢田丘陵南部に挟まれた盆地集落において、特に中世期の山城（城郭）遺構を含む集落、尾根、沢筋における本植物の分布をルートセンサス法によって調べた。さらに、近畿圏に散在する中世の山城遺構におけるテンナンショウの分布を調べた。

盆地集落における分布様式：ルートセンサスは、踏査ルートの左右両側5 mにおけるテンナンショウの個体数を数え、踏査距離100 m毎を1つのユニットとして実施した（1ユニット=1,000 m<sup>2</sup>）。分布様式（均等分布、ランダム分布、集中分布）は、Morisita (1959) のオーバーラップ指数によって評価した。平群町を南流する竜田川を挟んだ西側を生駒山系(踏査距離61.7 km)、東側を矢田丘陵(同36.5 km)とし、さら

に集落、尾根、沢筋を区分して集計した。両山系においてウラシマソウ (*A. thunbergii* subsp. *urashima*) の分布が最も多く、次いで、キシダマムシグサ (*A. kishidae*)、カントウマムシグサ (*A. serratum* var. *serratum*) の順に多かった。どの区分においてもテンナンショウは集中分布し ( $I_o > 6.53$ ,  $\chi^2 > 262$ ,  $P < 0.01$ )、特に生駒山系では信貴山城跡を中心とする山城遺構および近隣の寺社に、矢田丘陵では椿井城および中世武将の城館跡に集中分布した ( $\chi^2 = 149$ ,  $P < 0.01$ )。

近畿の山城遺構における分布：近畿圏に散在する多数の山城遺構のうち、兵庫県 (6)、京都府 (3)、奈良県 (8)、大阪府 (4)、滋賀県 (6) の計27遺構について、テンナンショウの生息の有無を調べた。その結果、19の遺構においてテンナンショウの生息を観察した。カントウマムシグサ、ウラシマソウ、およびムロウテンナンショウ (*A. yamatense* subsp. *yamatense*) は広く分布していたが、アオテンナンショウ (*A. tosaense*) とキシダマムシグサは、それぞれ淡路島の白巢城跡、および平群町の信貴山城跡のみで観察された。

結論および考察：テンナンショウは山城遺構および関連軍事施設に普通に、また集中的に分布していた。なぜ山城に集中分布するのか？については本現地調査で考察し得る範疇ではないが、人為構造物の遺構および近隣寺社での集中分布にはなんらかの人為的行為の関与、例えば、積極的な移植や保全、または現行の除草剤など、が示唆される。一方、中世医書 (『頓医抄』『万安方』など) では、テンナンショウは破傷風の治療薬として挙げられ、さらに戦傷救急医療の記述に特化した『金瘡療治抄』ではテンナンショウの処方頻出しており、テンナンショウの分布に関して薬用として人為的関与の可能性についても考慮する必要がある。

## ●焼畑実践20年のレジメ

山口聰 (林間園芸研究センター)

愛媛大学農学部焼畑の会、山起しの会、仁淀川の緑と清流を再生する会として関与して来た焼畑の実践活動のこれまでおよそ20年間の経過について報告した。在来の作物と野菜を栽培し採取するだけでなく、地域の方々と調理・加工・貯蔵などの手法を記録し、伝承を続け、ここはその間に全国焼畑サミットの第一回目の開催地ともなった。当地特産の赤カブについても地域おこしの一環として栽培が復活するきっかけとなっている。この赤カブは従来の報告では東日本に多いシベリア経由のもので、その渡来については現在調査中である。現地に民家を借りて宿泊もできるセンターとして資料の収集保存と情報発信の基地となっている。